

2022年 小教区評議会役員研修会 ふりかえり

グーグルフォーム、及びメールにて30件のふりかえりが寄せられました。

教会や個人が特定できる内容などはカットしております。

講話を聴いて、気付いたこと、学んだこと	
★	<p>これからの教会共同体づくりについて、考えさせられました。シノドス分かち合いの中で、私たちは様々な変化を感じ、変化に対応することに苦慮していることをたびたび論じていますが、変化に前向きに対応していく、という目線を得ました。奥村神父様がおっしゃった、秘められていたことが御子によって開かれたように、この機会に私たちが、教会が自己開示する機会になっていくことが続いていく、というお話には希望を得ました。また、小立花神父様のお話しは自分が小教区再編にあたって申し上げた意見を代弁してくださったように思い、大きくうなずきながらお聞きしました。菅原神父様のお言葉にはおおいに労われ、この低迷期を支える、というお言葉、今後の糧になると思いました。一場神父様の謙虚な感想を伺って自分自身も謙虚に受け止め行動にしていきたいと思いました。司教様のお話しでは、元和大殉教を通して、今の苦しい信仰生活を支えることの勇気を頂きました。ありがとうございます。</p>
★	<p>月一回かつ地区分け状態となっており、この間転出された方やお亡くなりになられた方もおられました。別地区で家族葬で、亡くなられた実感もないままです。私の子供もすっかり行かない癖がついてしまいました。そのような状況の中での今日のお話、奥村神父様、今まで閉じていたものが明らかになった、キーワード「自己開示」役員をしていることもあり、同時に教会メンバーの思いや考え（偉大な先人が多いです）を知る機会があり、自分の未熟さをいつも感じる次第です。小立花神父様、高齢化の進む中、人が大事、制度や組織はその次、それを支えるものであるべきだというのは教会運営をして行く中で改めて心がけるよい教示となりました。そして菅原神父様、普段のミサが行うことがいかに大変ですごいことか、役員となった今でもそうした皆様の営みが分かってきたこともあり実感しております。これらに思いを新たにして、皆様と、神様と共に歩んでいきたいと思えます。</p>
★	<p>役員としてのスタートは19年2月でした。主日ミサに与り、そのまま教会を後にするといった、あまり熱心とは言えない信者である私は、当然「役員」の仕事については全くの「素人」です。それでも周囲の皆さんに助けられ、日常的な「仕事」を何とか進め、翌年の信徒総会を乗り切ったと思った途端、「コロナ禍」の出現でした。ルーティンさえおぼつかない状態の私に、諸業務に精通した方でも都度の工夫と判断を求められる日常が被さってきたのです。悩みながら、迷いながらの歩みに勇気を与え、方向を示してくださる神父様、同僚役員の方には感謝しかありません。そんな私ですが、今日は沢山のヒントを戴きました。「自己開示」・「共同体創りは『人』」・「愛」、更に、「ピンチはチャンス」と。30年後の彦根教会を想いつつ、有り難うございました。</p>
★	<p>コロナ禍の中で小教区の活動は大きな痛手を被ったと私は感じていました。しかしながら、今日の研修会で神父様方のポジティブな受け止め方を伺い、「あっ、そう受け止めないと本当のみ旨が見えないのだ。」と気付くことができました。小立花神父様がおっしゃっていた神の自己開示を正面から受け止めて、具体的にどう展開していくかを考え、実践していくことに取組んでいく所存です。菅原神父様の「低迷期を支えた選手たちの話は腹に落ちました。現状をきちんと認識しながら、具体的な小教区の姿を皆でいつも分かち合い、粛々と活動していく姿が理想だと思えます。同じ信者といっても色々な考えを持って活動しています。共同体が一致しいけるのは、コミュニケーション方法などの手段ではなく、ミサから始まりミサに終わるのだと思えました。今日いただいた拠り所を糧に役員活動を進めて参ります。</p>

講話を聴いて、気付いたこと、学んだこと	
★	シノドスの質問に回答するプロセスで、気づいていなかったことに気づかされました。人が集まることの大切さ、集まってともに働くことが人と人をつないでいたこと、不安を感じながらもできることを通じて共同体を支え続けた人の存在など。信徒一人一人の多様な思いが、それぞれ大切に受けとめられることは困難かもしれませんが、信徒同士が互いを思いやることがばを交わし、ともにミサで祈ることが共同体を支えているという喜びの実感があります。「仲間／取り残された人は誰か」という質問で、助けが必要な人、つながりが失われつつある人の存在を意識しました。すぐに何かできなくても、人と人をつなぐ役割になり、それが神とのつながりにもなる、そんな空間的・時間的な連鎖を想像することは希望です。互いにかかわりあい、生き生きとした集まりになるために必要な関節、小さな声を拾う耳になれるように。
★	私が、講話、コメントで考えたことについて記載します 1. 奥村神父様の講話 コロナ禍のミサの開催について、神父様がミサの開催に向けて取り組まれているお話が聞けて、改めてミサによる人と人との交わりの大切さを考えました。 2. 小立花神父様の講話 目標が行動を妨げるというお話は非常に共感しました。目標、決まりは絶対で、これ以外の行動は悪とさえ思われる場合があります。目標、決まりの別の行動を行っても良いということをお話して頂けたと思います。このお話は多くの方に共有したいと思います。 3. 菅原神父様の講話 コロナ禍においても、失ったものは何もないと言われたことについて、この困難な時を共に過ごしていることが意味のあることだと考えました。 4. 一場神父様のコメント 講話へのコメントということでお話しされましたが、私は、各講話の内容を解りやすく解説して頂いたと思い、より各神父様の講話の内容が理解できました。非常に感謝しています。
★	毎日の暮らし、地域において、仕事において、そして教会においても、少子高齢、人口減少、コロナ禍、人財不足、なかなか進まないダイバーシティ、IT化の遅れ、不況など、肌身に感じることもばかりです。この現状に打つ手、抗いようがないと思うこともしばしば。そのような中、研修では、「ときとして目標が行動を妨げている」「人を大切にすることが最も大切」「失ったものはない、得たものはある。」「自己批判や反省ではなく」「低迷期支える」など、大塚司教様をはじめ、4名の神父様の一言ひとことが心に沁みました。「共に歩む」は、私たち一人ひとりが、今、心から求めていることだと思います。2050年の教会はどのようになっているか？その問いに、共に歩むことで、未来を創ることができる、そんな風に思いました。初めての役員になり、初めての参加した研修会は心に残る会でした。ありがとうございました。
★	・奥村神父の話は、三重を訪問しただけに、良くわかった。広い土地を三人の神父様が分担している状況、外国人の多い状況もうかがえた。 ・小立花神父は、未来の教会を考えるきっかけになった。江戸時代の神父のいない教会運営の可能性も感じた。こうすべきと他人を指導する危険性も気づかせてくれた。 ・菅原神父は、逆に現在どれだけ信徒が無償で教会のために働いているかに気をつけてくれた。逆に2000年からの共同宣教司牧以降20年以上働き、あまりに皆高度になってきたのが、次の世代が重たく感じる危険性も感じた。 ・大塚司教は江戸時代の信仰のありかたを取り上げて、これからの教会のあり方を考えさせてくれた。ネット時代、SMS時代の新しい信仰の形が若者を救うことができたらいいなと感じた。

講話を聴いて、気付いたこと、学んだこと	
★	<p>◆3人の神父様の講話はコロナ禍、およびコロナ後の教会の在り方、進み方に3様のお考えをお聞きし、興味深く聞かせていただきました。</p> <p>お話を聞いて私にはコロナの後は今までと同じやり方の教会ではだめではないかと思うようになってきています。</p> <p>はっきり不安です。日本の社会と同じ問題が教会にも当てはまるのではないかと。</p> <p>* 高齢化による影響 <例えば免許の返納・車でしか行けない教会は行けない 教会の働き手がいなくなる（評議員、役員など）いろいろな活動が鈍る></p> <p>* 若い人が来ない？教会に行くのにストレスがかかるのでは？と思ったりします。祈りの場なのだと思いますが・・・</p> <p>そのような未来への悩みを少しでも和らげるヒントのある講話だったと思います。コロナ禍で学習できたことを生かしていく術を垣間見た気がします。</p> <p>ありがとうございました。</p>
★	<p>今年から役員になり初めて役員研修会に参加いたしました。テーマである「シノドス・ともに歩む教会共同体づくり」の「シノドス」について理解しておりませんでしたので調べ、「ともに歩む」という意味で一定時に会合する司教様たちの集会のことと知りました。今回の研修会では神父様方々の教会共同体在り方について直に伺う貴重な機会となりました。アプローチは異なりますが、教会の共同体としての根本的な意義については同じことを仰っていたと理解しております。今後の日本は低迷期どころか2050年までも、ますます衰退の道を進むのは明らかであります。そのような状況にこそ「シノドス・ともに歩む教会共同体づくり」が大切になって来ると考えます。まだまだ信者として未熟であります。勉強しながら弱者に寄り添う教会共同体のお役に立てるように努めて参りますので今後とも宜しくお願いいたします。</p>
★	<p>シノドスということについて、「世界代表司教会議」というある意味で閉鎖的とも思われる様に捉えるのではなく、「ともに歩む」という広くて根源的なとらえ方をすることで、急に大切に身近なものに感じる事が出来た。私たちはキリスト者ですから、「キリストとともに歩む」ということを大前提としながら、その上で「誰と、どのように、どこをめざして歩むのか」ということを日々大切にしながら（反芻し、絶えず問い返ししながら）過ごしたいと、お話を聴きながら改めて思いました。</p>
★	<p>●【もっとシンプルに】 あらためて教会を見直し、当たり前ことに感謝を発見したいと思いました。慣習的・惰性的にやめられない活動もやめるチャンスです。今の人数、身の丈に合わせてリサイズしていくチャンスでもあります。活動のための活動にならないように、教区・ブロックでも活動を減らして頂きたいと切に願っています。週に1度のミサにもっと専念することで心に余裕もでき、互いへの思いやりも生まれるのではないのでしょうか。</p> <p>もっと活動するのではなく、もっと祈る共同体になれば良いなと思います。</p> <p>●【教会によって違う】 神父様によってコロナへのお考えが違い、ミサに積極的な教会から慎重な教会まで幅があることがわかりました。「司教様がいいと言われればOK」といった意見もあり、信徒間でも揉めるのですが、ブロックのモデラールのお考えに従うということが大切であり、信徒にもそのようにお伝えする必要があると感じました。</p>

講話を聴いて、気付いたこと、学んだこと	
★	<p>コロナ禍での環境で、役員はどうしたら信者の皆さんに寄り添い慰め励ますことができるのだろう…知恵を絞り考えました。当たり前の日常が非日常になった時に初めて気が付くことの連続です。どんな情報も今まで来ていた信者の皆さんに公平・平等に共有する事。「人」を大切にする。これを忘れてはいけないのだと思いました。連絡網の見直し、長年確認していなかった名簿の更新。ミサ再開の環境設定を安全に、感染させない！と徹底したルールを実施。</p> <p>シノドス回答書を評議員会からのレポートをまとめる作業で悪い事、不満を言うのでは現状が改善されない。良い教会作りもできない。</p> <p>私の傲慢さを反省する事から始めました。</p> <p>たくさんの気付きの中で苦しみや試練と思っていた事、虚しさや切なさ、それは願いに変わりました。願いは希望になりその希望は、できることをしようという意欲に繋がりました。これこそ「神様の計らい」一筋の光を与えてもらったと思います。ありがとうございました。</p>
★	<p>4人の神父様と大塚司教様のお話はそれぞれ心に響くものがあり、有意義な時間を過ごすことができたと感じています。特にその中でも小立花神父様のお話は2050年の教会の姿を妄想されたということで(私はもうこの世にいないと思いますが)私たちの教会が姿を消し信者も激減しているかもしれないと考えるだけで本当に悲しく恐ろしくなりました。けれどその妄想が現実とならないよう今からできる限りの努力をしなければ、という気概も生まれました。教会全体で具体的な目標を掲げ、守るべきものは守りつつ、前進・向上しなければなりません。神と人を大切にする教会であり続けなければきっとよりよい未来があることも神父様方のお話で良く分かりました。時として役員の仕事に疲れ「神と人を大切に」する心を見失うこともあります。キリスト者であるという原点を忘れず、奉仕を喜びとして役員の任期を全うし、その後も教会のために働いていけたらと願っています。感謝のうちに・・・</p>
★	<p>良い機会をいただき、感謝します。思いがけずネットの不調があったので、動画も有難かったです。</p> <p>一場神父様が、神父様方の全然違うお話の中にも共通点が読み取れるとおっしゃっていたのを聞き、やはり、自分の立場で耳をすまして、真の声を読み取るという過程が必要なのだろうなと思いました。小立花神父様のお話では目標が掲げられた気がして、菅原神父様のお話では思いやりと慰めをいただいた気がしました。(奥村神父様のお話はこれから聞きます。)それらをいただいて、疲れた自分はどこを抛り所にするか、元気な自分はどこを抛り所にするか、その時々で、まじめに、自分の判断でなく、耳をすませて聴こうと思いました。</p> <p>ありがとうございました。</p>
★	<p>奥村神父様からは「共同体の集会での信仰・典礼による交わり、相互の自己開示を通しての新たな交わりの発見」の観点から、司祭として歩まれている生き様をお伝えいただき、うれしく思うと共に、その姿勢に習っていこうと促されました。</p> <p>小立花神父様からの「人間的な思いを排し、教会の奉仕で寄り添うべき人を忘れずに」との熱い思いは、胸にこみ上げてくるものがあり感動的でした。これを契機に信仰を見直し、「人に教えるよりも汗をかき働く」とのご助言を実践する決意です。</p> <p>菅原神父様からは「教会でのひたむきな奉仕の尊さへの新たな気付き」をお伝えいただき、神の招きと、奉仕者が低迷期を支えつつこれに応えることで実現しているこの御業に「キリストに賛美！」の気持ちでいっぱい、同じ信仰をもつ者として幸せです。</p> <p>一場神父様とも喜びと感謝を分かち合い、役員研修会での豊かな恵みと共に、皆様と共に歩んで参ります。</p>

講話を聴いて、気付いたこと、学んだこと	
★	<p>教会という共同体の重要性があらためてクローズアップした感が深まり、「人」を大切にすることを痛感しました。</p> <p>それと共に、人の意見を聞くという基本的な共同体としての姿勢を構築していくことが必要であることを再認識しました。</p> <p>この姿勢がこれまで継続してきた小教区でのミサに与えられるという神の教えに結びつくものであり、神の呼びかけに応えるという信仰の恵みに与えられるのではないかと思います。</p>
★	<p>今回の研修会では吃驚するほどテンポよく講師の神父様方の話が進んでいたことに新たな思いで聞かせていただきました。15分間の話は集約された内容でした。奥村神父様のコロナ禍の中福音を延べ伝え、神を証ししていくためにできるだけ多くのミサを行って来られた勇気に凄いと思いました。そして小立花神父様の30年後の教会の話に考えたことがない私には新鮮に感じました。所属教会では5年後には存在しているか心配なことを神父様たちはもっと先の将来のことを真剣に考えておられることに、形が変わっても教会は存続していくであろうと確信しました。菅原神父様の話には身につまされる思いでした。</p> <p>私は役員としてまた教会の一信徒として教会共同体づくりに真剣に取り組んでいるのか問い直しています。ひとり一人が互いを大切にしながら、神様のみ旨にそって前進できることを祈る日々です。</p> <p>ありがとうございました。</p>
★	<p>この研修会を受け、それぞれの見方はあるが、皆このコロナ禍での異常事態をどうやって対応して行ったらいいのかという事は、共通の課題だった。またシノドスのアンケートについても、ミサが出来ない中どうやって分かち合いをするのか、と言う不安も同じだったと思う。当たり前にあったミサが出来なくなった時、潜伏時代の日本人の忍耐と強い信仰を思い出した。先祖が残してくれた大きな宝。比べものにはならないが、低迷期だからこそ忍耐を持って力を合わせ、何か変えていかないといけないという事を学ばされる。教皇様が「共に生きる」このテーマを分かち合って下さった事に今は感謝。ZOOMや動画など現代のアイテムを利用し是非、枠を超えてたくさんの人と分かち合いたい。しかし本音はマスクを外して顔を見て話したい、皆でミサをしたい、歌いたい。すべての人が地球と言う、神の愛の船にいることを忘れず、祈って行きたい。</p>
★	<p>3人の神父様のお話はどれも心に響くものばかりで、とても貴重な時間を過ごすことができました。それぞれ違う切り口からのお話でしたが、最終的には同じところに行きつくということは、驚きでした。ありがとうございました。その中でも、特に私の心に響いたのは小立花神父様のお話です。30年後のカトリック教会の姿は、何となく頭の片隅では想像していたとはいえ、衝撃的でした。私の教会も、高齢化が進み、日本人の子どもたちもほとんどいないという状況です。このような現状の中で教会を発展させるために何ができるのかは大きな課題です。そして、コロナ禍の中で大きく変わったミサの在り方。正直、評議員一同、かなり疲弊しておりましたが、一人ひとりに与えられた役割に神様があたたかく寄り添っていただけているのだと思うと、涙が出てきました。私たちも、神様のように、誰一人取り残すことのないよう「人を大切にする」ことを第一に、これからの教会の在り方を考えていきたいと思えます。</p>
★	<p>今回の研修会に参加させて頂き、神父様の講話を聴く事で色々と感じる事がありました。</p> <p>教会における共同体の大切な事は一体何だろうと最近考える事がありました。</p> <p>今回の講話を聞く事で共同体の中で人が大切であると再認識させて頂きました。</p> <p>お互いに人に対して寄り添い教会共同体を発展する大切さ学びました。</p> <p>どこの教会も高齢化がすすみ若い方の共同体への参加が減少しつつある現状に対して危機感も感じました。</p>

講話を聴いて、気付いたこと、学んだこと	
★	まず、奥村神父様が教会共同体の中での変化・新しい物への取組を話され、コロナ禍でオンラインを活用して集会を続けられたとのこと、教会=集会・集まり・信仰共同体・典礼共同体、信者以外でも福音宣教ができたとのことがとても印象に残りました。続いて、小立花神父様が2050年の日本の教会は？との問いや、菅原神父様の低迷期に関する講話において、いずれ現在ある複数の教会が一つの教会に集約される可能性があると言われていました。信徒は高齢化しており、教会が遠くになれば、ミサへの参加が難しくなると考えられます。教会が集約されても、年に2回～3回のミサを希望されている方が多くいます。そのためにも、また地域のシンボルとしても教会の建物等の維持・管理に取り組んでいます。評議会役員が各部会と連携しながら、一人ひとりが大切に支え合い、神と人を大切にし信仰と共に生きる共同体作りが出来るよう取り組んでいきます。
★	胸が熱くなり涙が溢れました。コロナ禍の役員としての3年に様々な想いを馳せませす。ミサ集会の維持・YouTube配信はどれほどか心の支えになったことでしょうか。教会は祈りの場とともに憩いの場であると痛感します。「人を大事にする。人に体制を合わせる」今後の目指す姿だと思いました。人の役に立たない現実がどれだけ自分を打ちのめすか。どんな人も切り捨てられないことを望みます。信仰をも忘れた病気の人はどうしたらいいのでしょうか…教会が救いの場であってほしいと願ってやみません。みな人は想いが違い申し入れがあるのは無関心ではない証拠で嘆きだと思わず。否定され言葉も失せ気持ちを吐き出せない疎外感を感じてしまいます。教会は偏見ではなく平等に想いを共有して分かち合える場であってほしいのです。講話を励みに自分は何ができるのかを問いかけながら愛と思いやりをもって相手の心がポツと明るくなるように対話を続けていきたいと思えます。
★	神父様方のお話から現在・将来の教会の姿、集まることの意義について多くの気づきを頂いた。 コロナ禍、神父様の口から「教会に来ないで」「ミサ後は早く帰って」と言われたとき、信徒の落胆と教会との距離感を強く感じた人は多い。 一方、ミサ集会を続けることの意義は理解できるが、コロナ禍での継続は地域の教会として近隣社会とどう整合するかの配慮が必要と思う。 役員に選出されると同時に司祭非常駐の教会になり、その直後のコロナ禍により、感染状況とミサの可否を神父様と相談することに翻弄され続けてきた。 シノドスのグループ分かち合いに際し、病者、高齢者など教会に来られない人、どの部会にも属していない人など集まるのが困難な人達は「グループ」から取り残されていることが気になっている。本当に必要な声はそのような人達から出るはずだから。 シノドスの回答を提出し、「終わった感」があるが、これからも日々問いかけられていることを意識し続けたい。
★	今回の研修を受けて、一番感じたことは勇気と希望をいただけたということです。役員の仕事をしても、コロナでできないことややらなきゃいけないことだらけだし、ミサにこられない人が増えるし、希望を持てずにいました。でも今回の研修で神父様たちのお話を聞き、こんなときだからこそがんばろうと思えました。人を大切にする教会、みんなで奉仕することに感謝できるミサ、できることからがんばっていきたく思えました。ありがとうございました。

講話を聴いて、気付いたこと、学んだこと	
★	<p>コロナ前、とコロナ禍の今で、いつも通りのミサのあり方が変わったことで、少しミサや教会に対する心持ちが後ろ向きになりがちになっているのはたしかにありました。</p> <p>ですが神父様方のお話しを聞くうち、コロナ前であっても、ちゃんと向き合っていたか？と自分自身に問いかけるきっかけになりました。</p> <p>いくつか抱えている問題の再認識、自分自身の気持ちのあり方、少しの勇気、全てを今すぐどうにかするすべは正直ありませんが、少しずつできる事からまずは動かなければ……と思います。</p> <p>「誰か」を待つのではなく、「できることを自分から」自分自身が変わっていかなくちゃと考えさせられました。</p>
★	<p>今回の役員研修会を振り返り、感想等を下記させていただきます。</p> <p>まず、3人の神父様によるご講話は内容も素晴らしく、かつ理解しやすく、有難く拝聴できました。準備は大変であろうと思いますが、今後も更にこのようなお話を拝聴できる機会があれば有難く思います。</p> <p>一方、私たちの小教区の現実、信徒の超高齢化、青少年の激減、また海外からの信徒とのコミュニケーション及び一体化など、たくさん問題・課題を抱えています。おそらく、ほかのブロック、小教区も程度の差はあれ、同じような状況かと思えます。このような問題・課題に対して、私たちは今後どのように対応、アクションを起こすか指針を探るため、各ブロック・小教区の聖職者、信徒の方々と、分かち合い話し合う機会があればよいと思えます。</p>
★	<p>コロナ禍を経験しミサがなければ信者間の繋がりが遮断されてしまうことを強く感じました。信者は職業等から社会の中でいろんな経験から知識を得て技能/技術を磨き世に貢献した人たちの集団でもあります。これら個人のタレントを信徒内で共有しながら信徒間の繋がりを強固にできるのではないかと考えます。</p> <p>教会の将来は子供の教育に生死がかかっていると言っても過言ではないと思えます。小さい時から常に神様と共に生きていることを意識させるためメダイを掛ける朝晩の祈り食前食後の祈りから始め大人になっても褪せない魅力ある教会を指導する必要があると思えます。そのためには基本的で最低限の教育計画が必要と考えます。</p> <p>ミサ参加者数の減少と複数国外国人の増加は現在の状況からも強く感じています。教会の将来5年後10年後を想定した目標を策定し年間計画に盛り込み活動していくことが必要であると強く感じました。ありがとうございました。</p>
★	<p>今回の役員研修で、司教様はじめ神父様方のお考えを聞かせていただきました。特に、小立花神父様の「2050年の教会（姿）」についての問い掛けに、衝撃を受けました。形有るものは全て様変わりし、自分自身ができる何か形有るものを残そうという考えは、全く無意味であることを痛感しました。</p> <p>何か形を残すのではなく、人を繋いでいく。人と人との繋がり、人から人へ繋いでいくことの重要性を、再認識することができました。</p> <p>教会活動の中で奉仕するうえで、表面上の形ではなく、本質的なところを見直す機会となりました。</p>
★	<p>今回の貴重な役員研修会に参加できたこと、有難く思います。各神父様のお話が聞いて非常に参考となりました。お話は、それぞれの神父様が得意な話し方をされたと思います。</p> <p>コロナ禍にあっても、各神父様が全て前向きに考え、行動されている点です。表現方法は、違っておりましたが、自己開示・やさしさ・低迷期での取り組み等すごく分かりやすい内容でした。私どもも前向きに福音宣教に取り組んでいきます。</p>